

## 保健所の今後の母子保健活動のあり方に関する研究

### 思春期保健

細川えみ子\*

要約：身体的成熟の早期化と社会的成熟の遅れによる青年期の発生に対して、古典的な儒教道徳では対処できず、現代の青年期は矛盾を抱えている。青少年の自己決定力を高めるための科学的情報提供と人権教育、困ったときの専門家の相談診療体制の整備が必要である。保健所は地域の専門家集団として青少年自身や学校・地域に働き掛けられる可能性がある。

見出し語：10代の妊娠、性教育、リプロダクティブ・ライツ、思春期クリニック

#### 1 青少年期の現況

##### (1) 近代が生みだした青年期

青年期という概念は、近代が生みだしたものである。わが国においても、江戸時代あるいは明治初期までは、身体的成熟をもって社会的成熟と見做された。しかし、近代工業国家を目指し効率的労働力を育成するために強力に推し進められた「教育」は、その長期化にともない社会的成熟を遅らせ、一方栄養状態の改善に伴い身体的成熟は早期化し、その狭間に青年期を生ぜしめたのである。

「家」意識を強化するために流布された儒教

道徳は2000年以上前のものであり、青年期の存在を前提とはしていない。したがって青年期を律するモデルとはなりえず、実状に合わない管理主義が横行する中で、現代の青年期は矛盾に満ちたものとなっている。

青年期は、二次性徴をメルクマールとする思春期に始まり、経済的・精神的に親から離れる社会的成熟までをおおむね指している。この時期の特徴は反抗と独立であり、また性的成熟からメイティング即ち性的パートナーの探索の時期である。こうした特性を生かした新たなモラルの創造が必要とされている。

\* 目黒区碑文谷保健所

## (2) 現代日本の青年期

現代日本では、中学・高校・大学くらいの時期が青年期にあたろう。本来この時期は、他人との人間関係を学ぶ社会化と、独立した大人としての健康なライフスタイルの確立のための重要な時期である。

しかし、わが国では学歴社会の軋轢から極端な教育圧力にさらされる。他のすべてを差し置いて、ペーパーテストのみで測られる暗記力だけで順位がつけられ、それが絶対的な評価となる。こうした極端な競争社会は、精神的なストレスになるばかりではなく、連帯や共感などの人間としての社会化を阻害する。

こうして学歴社会では、勝ち残った「優等生」は非人間化し、そこから落ちこぼされた者は自信を無くし自尊心を打ち砕かれ、精神的な問題から非社会的になったり、自己破壊衝動から反社会的行動に走ったりする。いじめによる閉じこもりや自殺、喫煙や飲酒の一般化、また集団化が反社会的行動に向かう青年期の犯罪など、こうした例は枚挙に暇がない。

このように、わが国の青年期においては、学歴偏重により適切な社会化を困難にし、また健康なライフスタイルの形成のための訓練過程も貧弱であり、多くの問題をはらんでいると言わざるを得ない。

## (3) 情報化社会での性行動

母子保健の観点からは、健康なライフスタイルの一環としての性行動を無視するわけにはいかない。人口動態統計上からは、わが国の10代の出産数は増加傾向とはいえ国際的な比較の中では非常に少ない。また、人口妊娠中絶につい

ては年間30,000件程度で減少傾向にあり、人口比も1,000対6.6と国際的に見ても非常に低く、30代の20程度に比べればおおむね健全と言えよう。

しかし、個々のケースを検討すると、さまざまな問題点が見えてくる。「青少年の性行動」調査報告を見ると、男女とも初交年齢は早期化する傾向にあり、その動機は女子では大半が、「好きだから」「愛しているから」だが、「無理矢理」が特に中学生では4人に1人もおり、また男子では「好奇心で」や「遊び半分で」などが過半数を占める。こうした男女のミスマッチは、社会における性別役割分業論や女性差別を反映したものである。

学校における性教育は学習指導要項の中に組み入れられ、小学校5年生から義務化されたが、「雨降り保健」の実状や教師の性意識の遅れから実体はまだまだ貧弱なものである。その一方マスメディアによる情報は大人の性差別文化の歪みを増幅した形で膨大に流されている。双方とも十分な知識もなく対等の関係でもない性行動の中では、避妊の実行率も低くその結果当然のごとく望まない妊娠が発生する。

こうした問題を抱え込んでしまった少女たちは、自分たちだけで解決しようとする。何故なら、親は自分の行動を理解してくれるとは思えないし、教師に知られば女子のみ退学処分を受ける可能性が高いからである。生殺与奪権を持っている大人に弱みは見せられないと、問題解決力の低い子供たちだけで対処することが、問題をさらに深刻化する。

## 2 内なる力の涵養

### (1) 管理強化より自己決定

こうしたさまざまな問題を解決するための方向は、既に身体的には成熟した青少年の管理を強化するのではなく、自尊心に支えられた自己決定力＝内なる力を育て社会的成熟を助けることである。自己評価の低い者ほど自己破壊的な選択をする傾向があることは銘記しておくべきであろう。健全な自己決定力をつけるには、自尊心が欠かせない。こうした自己決定を大人も尊重する姿勢が必要である。

親の管理下から離れ、自分に固有のライフスタイルを確立するにあたっては、その所属する仲間内の文化が大きく影響する。生命の重要性、人間一人一人の大切さ、人権を守ることの大事さ、女性差別の卑劣さを理解させることは、学校教育の大きな役割である。

また経験の少ない青年期には誤りは付き物である。そうした時に一刻も早く軌道修正をする力、最も傷の少ない問題解決をする力を身に付けさせることも重要である。そうした観点から見ると、わが国の学歴社会が一度落ちこぼれるとやり直しの利かない構造になっていることの問題性は明らかであり、子供たちの問題解決を助ける施策は不可欠である。

### (2) 早期からの情報提供・性教育

正しい自己決定の前提として、科学的な知識は欠かせない。早期からの身体についての教育情報提供を強化しなければならない。

特に思春期から青年期は二次性徴にともない個人差の大きい時期であり、身体観＝ボディ・イメージが歪まないよう、自己肯定的なアイデ

ンティティーが育成されるよう注意が必要である。そうした前提の下ではじめて、身体に害のある不健康な習慣の問題点や健康的な生活習慣の意味などが理解され、性行動をも含めた健康的なライフスタイルを自主的に身に付けることが可能となる。

性については特にタブー視されてきたために偏見にまみれており、科学的中立的知識の提供は重要となっている。その中でも特に、妊娠のリスクを負う女性の自己決定の尊重、去年の人口と開発国際会議でのキーワードである「リプロダクティブ・ライツ」について、理解させることが決定的に重要であろう。

### (3) 子供の人権とプライバシーを守る

子供たちが問題を抱えたときに、周辺の大人に相談できない最も大きな理由は、それが親や教師に知られてしまう恐怖である。子供とは言えプライバシーの尊重は重要であり、またそれがなければ彼らの信頼は得られない。

彼らの自己決定を尊重したうえで問題解決の方策をともに考え、その経過のなかで親などを巻き込むことが必要である。本人の意思を無視した対応はトラウマの元であり、二度と大人に相談しなくなるばかりでなく、友人関係を通して周辺にそうした警戒心を拡げてしまう。支援する大人は子供の人権に敏感でなければならない。

### (4) 思春期クリニックの必要性

思春期には、身体だけでなく精神的な問題も抱え込みやすい。そうした場合には相談だけではなく、医療行為も含めた解決方法をもって支援にあたる場所が必要であろう。欧米では形は

さまざまであるが、こうした思春期クリニックが整備されているところも多い。たとえば、スウェーデンでは家族計画協会が運営する若者向けの診療所があり、学校の性教育カリキュラムと連動した形で紹介され、避妊相談などの利用の便を図っている。また、アメリカでは10代の妊娠・出産のあまりの多さに、妊産婦のための高校があり、一般の高校でも校内にクリニックを設置し診療にあたっている。

わが国では、家族計画協会の設置する「オープンハウス」という診療所が東京にある以外には、心ある産婦人科医の診療所がいくつかあるだけで、思春期への援助としては決定的に不十分であり、今後公的な設置も含め検討すべき課題であろう。

### 3 保健所にできること

地域のなかで医療専門家集団としての保健所は、現在は思春期青年期の住民と直接接する機会はほとんど無いが、その対応次第では可能な施策がいくつも考えられる。

#### (1) 学校・地域・保護者への働き掛け

直接思春期の子供たちと接している大人は、親にしても教師にしても健康や性について科学的な知識を学んだことはなく、子供への対応についても戸惑っている場合が多い。保健所の技術職は医療職として健康の専門家であり、こうした大人を援助するのに最も良い位置にいる。

「思春期の子を持つ親の講座」などの実践例も数多くあるように、地域の親を対象とした子供離れ講座なども保健所の事業として企画できよう。また学校に働き掛けて、教師の性教育を援

助したり、生徒が乳幼児と接する機会を提供する「ふれあい教育」などを行っている保健所も増えてきている。

こうした役割は、地域全体として思春期青年期の住民を支援する一助となろう。

#### (2) 中立的・科学的情報提供

現在青少年の性や健康に関する知識の多くは、マスメディアを通じて得られている。したがって、正確な知識もあるが偏見に満ちたセンセーショナルな物も多く、まさに玉石混淆の情報氾濫にさらされている。

こうした中で、彼らが必要としているのは、事実をぼかしたお説教ではなく、価値観を押しつけない中立的・科学的情報である。保健所は地域の身体や健康の情報センターとして、こうしたニーズに最も適切に応えられる。青少年が来易い環境づくりを考えたい。

#### (3) 困ったときの相談者

問題を抱えた青少年とくに少女たちは、信頼できる相談相手を求めている。しかし前述したように、親や教師は最も身近な大人であるだけに本人の生殺与奪権を持っており、青年期の独立の気運からも、性の相談などは最もしにくい相手である。

そうした点からは、本人にとって生殺与奪権を持たない大人であり、専門職集団として科学的知識と地域のネットワークを持ち、公務員と医療職の二重の守秘義務をかけられた保健所職員は安心して相談できる可能性がある。その際こうした信頼を裏切らないためにも、子供の人権を守る守秘義務は非常に重要である。

こうした活動を本人の立場を最大限尊重しな

から実施していくことを通して、保健所は地域の青少年に信頼される支援者となりうるだろう。

#### 文 献

- 1) 日本性教育協会：「青少年の性行動」第4回、わが国の中学生・高校生・大学生に関する調査報告、1994
- 2) 優生保護統計



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:身体的成熟の早期化と社会的成熟の遅れによる青年期の発生に対して、古典的な儒教道徳では対処できず、現代の青年期は矛盾を抱えている。青少年の自己決定力を高めるための科学的情報提供と人権教育、困ったときの専門家の相談診療体制の整備が必要である。保健所は地域の専門家集団として青少年自身や学校・地域に働き掛けられる可能性がある。